る。

この「無限闘争」という最終テーゼは確かに興味深いものの，作品外現実である「思想的転回」は唐突な印象がある。「転回」の論拠として挙げられるのは，作品『城』のリアリズム的世界，主人公Ｋの自己肯定的特性，そして「生の否定」や「罪の意識」が周辺登場人物に配置されている点であるが，それらはいずれも物語空間内での布置状況である。しかし作家の「思想的転回」は，創作活動の全般を見通して作家論のレベルで考察されるべきものである。この「転回」が作家カフカにとってどのような内的一貫性があり，また作家の創作原理としていかなる意味を持つのか。これに十分踏み込めていれば，本書の『城』の解釈はさらに厚みが増したはずである。そしてまた，氏の言う「転回」による「新生カフカ」の創作原理が『城』以降の著作活動にどのような影響を与えたのかを明らかにしていれば，本書の学術的価値は格段に高くなっただろう。小説『城』は1922年の1月から8月にかけて成立した作品であり，カフカの到達点ではなく，24年まで続く晩年の創作活動のいわば出発点をなしているのだから。

本書は，三瓶氏の「修士論文以来三十数年に及ぶカフカ研究の集大成」であり，氏の『カフカ　罪と罰』(2001年)，『カフカ　内なる法廷――『審判』論』(2006年)の続編にあたる。唐突に見える「思想的転回」も，本書で再三強調されるカフカの文学的発展も，氏の長年にわたる研究活動で描かれてきたカフカの全体像のなかで評価すべきものであって，本書だけで判断するのは早計なのかもしれない。だが，その全体像を評価することは，氏のカフカ研究そのものを評価することであり，むろんそれは書評の手に余る。これはカフカの受容史・研究史にこそ委ねられるべきものである。

（松籟社　2012年）

Nanao HAYASAKA:
Robert Musil und der *genius loci*. Die Lebensumstände des „Mannes ohne Eigenschaften“

桂　元　嗣

本書は1998年から2010年までに発表された著者のローベルト・ムージルに関する論文のうち，主にムージルの伝記的資料に関する論文をまとめたものである。この10年余りの間にムージルの伝記的事実に関する情報は著しく増加した。最近でも2012年にプフォールマンによるムージルのモノグラフィー（Oliver Pfohlmann: Robert Musil. Reinbek bei Hamburg 2012）が出版されたのは記憶に新しいが，なかでも決定的だったのは，2003年に出版されたカール・コリーノによる2000ページにも及ぶ膨大な資料を有した『ムージル 伝記』(Karl Corino: Robert Musil. Eine Biographie. Reinbek bei Hamburg 2003)の存在である。本書を紹介するためには，まずこの伝記と本書との関係について触れておかねばならない。というのも，著者は現在共訳者たちとともにこの伝記の翻訳・編集を手がけており（全三分冊のうち第二分冊まではすでに刊行されている），本書を執筆する過程でコリーノの伝記に対峙する必要に迫られたであろうことは容易に想像できるからである。事実，著者は序章でコリーノの伝記について触れ，翻訳の推敲作業を通じてコリーノの文章を暗記するほどまでに詳細にわたって検証したこと，コリーノの伝記が本書成立にとってのいわば「アリアドネの糸」であり，極めて広範囲にわたるコリーノの調査量におよぶものではないにせよ，彼の調査をさらに前進させるものでありたい，と記している。

しかし，だからといって本書がコリーノの伝記の補足にすぎないかというと，決してそんなことはない。全13章からなる本書のうち，ムージル家の出自およびムージルの祖父母のグラーツでの生活をまとめた第1章，『生徒テルレスの惑乱』の舞台のモデルとなったチェコ・フラニーチェ（メーリッシュ・ヴァイスキルヒェン）の旧陸軍上級実科学校を訪れた第3章，短編小説『グリージャ』の舞台のモデルとなったイタリア・トレンティーノのフェルゼン谷について書かれた第9章は，いずれもコリーノの伝記が出版される2003年以前に発表された論文をもとに加筆修正を行ったものであり，コリーノも少なからぬ箇所で著者の資料をもとに伝記の記述を行っている。なかでもコリーノが繰り返し言及しているローベルト・ムージルの祖母アロイージア・ムージルの日記――1880年にローベルトが誕生したときの状況を伝える貴重な資料である――は，著者とローベルトの姪にあたるエルネスティーネ・メーアヴァルトとの個人的な交流を通じてはじめて公になったものである。彼女が提供した数々の資料にはローベルトの祖父マティーアスの博士論文も含まれており，モラヴィアの小村リフタジョフのチェコ語を母語とする農家からいかにしてドイツ語圏を代表する作家が生まれたのかを考察するうえで，ブルノ（ブリュン）でドイツ語による高等教育を受けた祖父の果たした役割の大きさに気づかされる。のちに軍医として帝国内を渡り歩くことになるマティーアスの博士論文のタイトルは„De facie humana“，すなわち人間の顔がテーマである。マティーアスはこの論文でオランダの解剖学者ペトルス・カンペルを参照しつつ，口吻部の突出度合いを示す顔面角（angulus facies）について詳細な記述を行っている。著者は孫のローベルトが1914年の日記でヴァルター・ラーテナウの顔面を「顎の先から広い後頭部を結ぶ線が水平線に対しほぼ45度の角度をなしている」と描写している点に注目し，ムージルはこの時点で顔面角についての知識があったのではないか，また彼の自然科学的な素質は祖父側から受け継いだのではないかと推測している。ムージルの観相学への関心は，たとえば1913年に妻マルタの知人の紹介で「両側の壁一面に頭蓋骨が棚に載せられた長いホール」のあるローマの人類学研究所を訪れたことや，犯罪心理学者チェーザレ・ロンブローゾの影響を受けた精神医学者エルンスト・クレッチマーの『医学心理学』

(1922年)を読んだこととも関係しており，一概に祖父マティーアスからの影響だけでは説明できない。しかしローベルトがのちにエッセイ「新しい美学の端緒」(1925年)で映画に代表される芸術のもつ「観相学的印象」(バラージュ)を圧縮や転移による現実意識の平衡障害と心理学的に位置づけ，その高揚し，かつゆるんだ生の状態を「別の状態」と呼んでいることを考慮すると，祖父マティーアスの博士論文が観相学的関心にもとづいたものであったという著者の発見は，ムージル文学を解明するうえで容易には看過しがたい資料を提供している。

このように本書は，ムージルの生涯に関する極めて精緻な知識と豊富な情報源をもとに，著者が実際に現地へ足を運んで獲得した貴重な資料を提示しつつ，同時にその資料のもつ「まだ芸術作品へと結実してはいない事実や具体的な背景」に注目することで，ローベルト・ムージルというひとりの作家の生きた「場」から，いかにして彼の文学の中心をなすテーマが立ち現れるかを見定めようとしている。なかでも本書の第4章，第6章，第7章は，青年ムージルが処女作『生徒テルレスの惑乱』を発表するまでの間にどのようなかたちで文学活動をスタートさせ，またいかなる体験を経ることで「別の状態」という彼固有の文学的テーマを確立していくかを実際に検証している点で興味深い。第4章で著者はブルノのヤセルスカー(アウグスティーナ街(ガッセ)10番)4階にある，かつてのムージルの両親の住居に，ムージル研究者としてはじめて足を踏み入れている。1900年1月，ムージルはこの住居の一室で最初の創作の試みとされる「生体解剖氏の夜の書からの数葉」を日記に記している。著者はどの建物に足を踏み入れても，まずはメジャーを手に部屋の大きさを測定する。そして住居全体の見取り図を作成し，当時のムージルの行動をできるだけ正確に把握しようとする。それはムージル夫妻が第一次世界大戦中に滞在したボルツァーノ(ボーツェン)の住居(第10章)にせよ，ウィーン・ラズモフスキー街20番のよく知られたムージルの住居(第12章)にせよ，同じことである。第4章のブルノの住居においても，著者は6つの部屋の大きさを厳密に測量したうえでローベルトが青年時代を過ごしたと思しき部屋を突きとめ，「生体解剖氏の夜の書」を書くために眺めたであろう「庭園の向こうに家並みが浮かぶ」窓外の景色を写真に収めている(本書の表紙に用いられているのはそのときの写真である)。国際ローベルト・ムージル協会に本書の書評を寄せたヨーゼフ・シュトルツは，このような著者のいささか衒学的な「測量」について，それ自体は必ずしも必要不可欠な研究目的とはならないが，ひとつひとつの研究の完全さを物語るものだとして評価している。またシュトルツは，本書における著者のムージル作品の細部にまで分け入ろうとするまなざしは「あたかもナノレベルの世界が開かれるようだ」と記している。「生体解剖氏の夜の書」において窓辺に立った「ぼく」は，庭園の向こうに明かりのついた住居の窓を認め，その黄色い正方形の中に帰宅した人々のシルエットが浮かび上がるのを見つめているが，著者の「測量」によって，そのシルエットの動きがもはや人物を特定することのできないほど距離の離れた微細な動きであることがわかる。このとき，「ぼく」の「100メートルの厚さの氷に覆われた眼のもつパースペクティヴ」を，また「水晶の中に閉じ込められた一匹の蚊」

という連想を，そしてその蚊が蚊としての人格を失って黒い平面としか見えなくなる「ぼく」のまなざしを，より実感をもって理解することができよう。つまりここで若きムージルは，内から外を見，また外から内を見る，この特殊なパースペクティヴがもたらす変容した状態を叙述することによって，「ぼく」と窓の向こうで窮屈な衣装を脱ぎ捨てて内面をさらした人々との合一を描写しようと試みているのである。

第6章では「生体解剖氏の夜の書」がムージルのはじめての詩作の試みであるという従来の説をくつがえした2002年のヴォイェン・ドゥルリークの論文を紹介し，1898年の2月と11月にブルノの新聞にあいついで掲載されたムージルのものと思しき二作品(「交霊会(Eine spiritistische Séance)」，「薄明にて(In der Dämmerung)」)のテクストを全文掲載している。この二作品には“Robert”または“M. Robert”というイニシャルでの署名しか付されておらず，ムージルの手によるものであるという100パーセントの確証はないが，著者はたとえば「交霊会」の冒頭にある「それであなたは本当に霊の存在を信じるの？」という登場人物のセリフが，ムージルの戯曲『熱狂家たち』の冒頭「あなたはそれでは本当に迷信深くないの？ 人間の秘められた能力を信じないの？」というレギーネのセリフを思い起こさせるところなどから，両者ともムージルの手によるものであると断定している。また，コリーノが彼の伝記のなかでムージルの匿名で発表された初期作品がまだ存在する可能性に触れながらも，ドゥルリークの2002年の論文に言及していないことについて疑問を呈している(ただし日本語版のみ訳者により註が加えられ，ドゥルリークの論文が紹介されている。翻訳版『ムージル 伝記』ではコリーノの原註はすべて訳されているわけではない。また原書の出版以降に更新された新たな情報も記載されている)。この二作品が本当にムージルの手によるものであるかの真偽についてはさらなる議論があってもよさそうなものであるが，これまでまだあまり言及されていないのが現状である。ちなみに先に挙げたヨーゼフ・シュトルツの書評では，この二作品はムージルのオリジナル・テクストとして紹介されており，プフォールマンもこれにならっている。

第7章でもやはりムージルの文学的出発についての調査が行われている。ここで著者が記述するのは，シュタイアマルク州の保養地における，一般に「ヴァレリー体験」として知られるムージルの神秘的な体験の詳細であり，ムージル文学において「愛」の感情と「別の状態」とが結びつく重要な契機についてである。登山家でピアニストのヴァレリー・ヒルパートとムージルがシュラートミングで出会ったのは1900年9月のことであった。ムージルは当時すでに「ブリュンの作家」と自らを紹介している。彼はこの地で崇拝する女性を英雄のごとく手に入れたと思いきや，愛という感情のあまりの途方もなさに，その愛の原因であり対象でもある存在から一目散に逃げ去る。そしてフィルツモースの高原で「世界の心臓に入りこむ」かのような変容した生の状態を体験する。この神秘的体験は，およそ30年後に『特性のない男』のなかで「少佐夫人との出来事」としてあらためて描写されることになる。著者によると，当時のムージルはこのフィルツモースでの体験を描写するための十分な語彙を持ちあわせておらず，ベルリン大学で

心理学を学び，エルンスト・マッハについての博士論文を執筆する過程で，はじめてこの出来事の描写が可能になったのではないかと推定している。著者のこの解釈に従えば，本当の意味でのムージル文学のはじまりは，やはり『生徒テルレスの惑乱』が出版された1906年なのかもしれない。

このようにムージル文学生成の「場」を検証しようとする著者の試みは，ムージル文学を理解するうえで極めて有意義な材料を提供しているといえる。その一方で本書には，一見すると論文というよりは，むしろムージルの伝記的資料を現地で見つけ出そうとする著者の奮闘を描いた一種のルポタージュにすぎないのではないか，と思われる記述も散見される。その疑念は，求める資料が見つからなかったときでさえもその一部始終を論文に記載する著者の姿勢によっていっそう強まる。たとえば著者は，第2章の後半でクラーゲンフルトのザンクト・ルプレヒト教会を訪れ，ローベルトの姉で誕生後まもなく亡くなったエルザ・ムージルの墓石のありかを市当局に問い合わせている。エルザという失われた姉（Schwester）の存在と，彼女に対するムージルの感情に注目することは，のちの『特性のない男』のなかでウルリヒとアガーテとの兄妹愛や，ムージルにおける「遠き愛（Fernliebe）」のモチーフを考察するうえで重要であるが，彼女の墓石は結局見つからない。また12章では，ムージルの死の直前の1942年にウィーン・ラズモフスキー街20番にある彼の住居が差し押さえられた際，とある運送会社によって格納され，その後爆撃を受けて焼失したと伝えられるムージルの原稿や蔵書の最終的なゆくえを，その運送会社の所在地にまで実際に足を運んでつきとめようとしている。しかしかつて運送会社のあったドレスドナー通りでは，現在は金属スクラップ工場が経営されており，所長はムージルの名前は知っていたものの，ムージルの原稿や蔵書については何ひとつ知らない。これまでにムージル研究者がここを訪れたことはあるかとの著者の質問に対し，所長は「あなたがはじめてだ」と答える。著者のこれまでの徹底的な調査方法を知る読者であれば，思わず笑ってしまうようなエピソードだが，はたして論文としてこのくだりは必要なのだろうかという疑念もわく。しかし一見ルポタージュに過ぎないように思われるこうした記述によって，著者は自らの調査の徹底ぶりと求める資料の不在を強調し，資料の存在があいまいな場合に人々がさまざまに思い描くであろう恣意的な想像の糸を断ち切っているのである。「ファンタジーは恣意ではない」とは『特性のない男』で主人公が妹に伝えようとした言葉であるが，本書において著者が試みている「一貫して実証主義的」な探究は，ムージルが生涯をかけて描き出そうとした「別の」世界の輪郭を，可能なかぎり正確になぞろうとしている。

（München: Wilhelm Fink 2011）

編集後記

機関誌『ドイツ文学』146号をお届けします。

本誌は2002年に装丁とともに刊行体制を大幅に変えて再スタートを切ってから11年目を迎えました。ただしその間，会員の方もご承知のように刊行体制には曲折があり，ドイツ語による発信に力点を置いて合計年間7冊を刊行した時期もありましたが，その後冊数は4冊を経て，2008年以降は年間2冊を，1冊はドイツ語による国際誌，もう1冊は日本語とドイツ語による混合誌として刊行する体制で現在に至っています。この間の経過と，現状の問題，特に投稿数の減少について率直にお知らせし，活性化のためにより多くの投稿を呼び掛ける編集長名の文章を2012年度の「別冊」秋号に掲載しておりますので，ぜひお読みください。

一方，学術雑誌をめぐる環境は外的にも大きく変わりつつあります。本誌の国際版Neue Beiträge zur Germanistikは2012年の145号までは科学研究費助成事業によって，研究成果公開促進費からの補助金を受けて刊行してきましたが，来年度からそれが大幅に見直され，補助を受けるためには「国際情報発信強化」を重点において新規に申請をしなければならなくなりました。さらなる「国際化」への対応や電子ジャーナル化を見越したこの助成事業に本誌が採択されるかどうかは，実際のところ全く予断をゆるしません。たとえ補助金が得られないとしても，冊子体による刊行という形態を守りながら，こうした外的な変化にどう対応していくかが今後課題になるでしょう。

今号では9本の論文と7本の書評，3本の新刊紹介を掲載しました。投稿数については，それほど目立った変化はありませんでした。先の「別冊」の文章でも書いたとおり，見方によっては「特集」が主力になって，一般論文の掲載を圧迫しているように見えるかもしれませんが，それは編集委員会の意図するところではありません。むしろ一般論文のより活発な投稿があってこそ，独文学会の機関誌としての特性は示されると考えています。国際誌にも混合誌にも，会員のみなさんが「特集」テーマとの関連のいかんを問わず，今後も積極的に投稿されることを願ってやみません。

（編集長・田村和彦）

正誤表

Errata: Band10, Heft2

前号の混合誌144号192ページから197ページの書評の対象となった本のタイトルに誤記がありました。目次での掲出も間違っておりましたので，ここに訂正します。

誤（falsch）

Ryozo MAEDA: Mythen, Medien, Mediokritäten. Zur Forschung der Wissenschaftskultur der Germanistik in Japan.

正（richtig）

Ryozo MAEDA: Mythen, Medien, Mediokritäten. Zur Formation der Wissenschaftskultur der Germanistik in Japan.

日本独文学会機関誌編集委員会

田村　和彦（編集長）　福本　義憲（副編集長）　岩崎　克己（副編集長）

編集委員

池田　遊魚　稲葉　治朗　太田　達也　川島　隆　七字　眞明
嶋崎　啓　清水　誠　高池　久隆　高田　博行　高橋　亮介
畠山　寛　浜野　明大　葉柳　和則　藤縄　康弘　松原　良輔
三瓶　裕文　宮下　博幸　宮田　眞治　村山　功光　孟　眞理
森田　昌美　湯浅　博章　四ツ谷　亮子

Oliver BAYERLEIN　Arne KLAWITTER　Erich MEUTHEN
Markus RUDE　Eberhard SCHEIFFELE　Gabriela Maria SCHMIDT
Dieter TRAUDEN

編集・発行
©日本独文学会
東京都豊島区南大塚
3-34-6-603
電話　03-5950-1147
振替　00160-9-135018
郵便番号　170-0005

ドイツ文学
第146号（非売品）
2013年3月25日発行

制作
株式会社　郁文堂
東京都文京区本郷5-30-21
東大正門前
電話　03-3814-5571（代）
郵便番号　113-0033

http: //www.jgg.jp/　e-mail: http://www.jgg.jp/mailform/buero/

ISSN 0387-2831

畠山　寛 Hiroshi HATAKEYAMA: キリストの表象と詩の断片化――ヘルダーリンの後期讃歌『パトモス』の改稿について――(Die Vorstellung Christi und Fragmentierung des Gedichts. Zu Hölderlins Überarbeitungen der Hymne „Patmos“) 103
宇和川　雄 Yu UWAGAWA: 文献学と歴史――グリムからベンヤミンへ――(Philologie und Geschichte. Von den Brüdern Grimm bis Walter Benjamin) 119
風岡　祐貴 Yuuki KAZAOKA: 不定代名詞に込められた意味――インゲボルク・バッハマンの詩「謎 Enigma」について――(Die Bedeutung des Indefinitivpronomens „nichts“. Zu Ingeborg Bachmanns Gedicht *Enigma*) 133

*　　*　　*

書評（Rezensionen）

眞鍋　正紀著『クライスト，認識の擬似性に抗して――その執筆手法――』(Masanori MANABE: Kleists Schreibweise. Gegen die unabweisbaren Täuschungen des Erkennens.) ..... 広瀬　千一 Senichi HIROSE 150
三瓶　憲彦著『カフカ　隠喩の森から共同体へ』(Norihiko MIKAME: Franz Kafkas “Das Schloss”: Aus dem Labyrinth der Metapher heraus in die Wirklichkeit der Gemeinschaft) ..... 尾張　充典 Mitsunori OWARI 152
Nanao HAYASAKA: Robert Musil und der *genius loci*. Die Lebensumstände des „Mannes ohne Eigenschaften“ ..... 桂　元嗣 Mototsugu KATSURA 156
時田　郁子著『ムージルと生命の樹――「新しい人間」の探究』(Yuko TOKITA: Musil und der Baum des Lebens. Die Suche nach dem neuen Menschen) ..... 満留　伸一郎 Shinichiro MITSUDOME 161
書評三篇　近年のベンヤミン受容――そのアクチュアリティー　Sammelrezension zu drei japanischen Monographien über Walter Benjamin (仲正　昌樹著:『ヴァルター・ベンヤミン――「危機」の時代の思想家を読む』 森田　團著:『ベンヤミン――媒質の哲学』 内村　博信著:『ベンヤミン　危機の思考――批評理論から歴史哲学へ』(Masaki NAKAMASA: Walter Benjamin. Denker der Krisenzeit. Dan MORITA: Die Philosophie des Mediums nach Walter Benjamin. Hironobu UCHIMURA: Walter Benjamins Theorie der Kritik als Geschichtsphilosophie.) ..... 小林　哲也 Tetsuya KOBAYASHI 163
Manuela Caterina MORONI: Modalpartikeln zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur ..... 生駒　美喜 Miki IKOMA 173
清水　誠著『ゲルマン語入門』(Makoto SHIMIZU: Die germanischen Sprachen. Eine Einführung) ..... 河崎　靖 Yasushi KAWASAKI 178

新刊紹介（Kurzbesprechungen）

Stephan Habscheid (Hrsg.): Textsorten, Handlungsmuster, Oberflächen. Linguistische Typologien der Kommunikation ..... 芹澤　円 Madoka SERIZAWA 182
Heike Wiese: Kiezdeutsch. Ein neuer Dialekt entsteht ..... 田中　翔太 Shota TANAKA 183
Stefan Enzinger: Kausative und perzeptive Infinitivkonstruktionen. Syntaktische Variation und semantischer Aspekt (studia grammatica 70) ..... 髙橋　美穂 Miho TAKAHASHI 184

日本独文学会機関誌編集・刊行規程 185
日本独文学会機関誌投稿要領 187
日本独文学会機関誌執筆要領 191
執筆者連絡先 (Adressen der Beiträger/innen) 194
編集後記 196

Internationaler Beirat
Gabriele BRANDSTETTER (Berlin)
Wai Meng CHAN (Singapur)
Konrad EHLICH (München)
Veronika EHRICH (Tübingen)
Cathrine FABRICIUS-HANSEN (Oslo)
Stefan NEUHAUS (Innsbruck)
Monika SCHMITZ-EMANS (Bochum)
Erwin TSCHIRNER (Leipzig)

© IKUBUNDO Verlag GmbH Tokyo 2012

Alle Rechte vorbehalten. Ohne schriftliche Genehmigung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik ist es nicht gestattet, das Werk unter Verwendung mechanischer, elektronischer und anderer Systeme in irgendeiner Weise zu verarbeiten und zu verbreiten. Insbesondere vorbehalten sind die Rechte auf Vervielfältigung — auch von Teilen des Werkes — auf photomechanischem oder ähnlichem Wege, der tontechnischen Wiedergabe, des Vortrags, der Funk- und Fernsehsendung, der Speicherung in Datenverarbeitungsanlagen, der Übersetzung und der literarischen oder anderweitigen Bearbeitung.

Druck- und Bindearbeiten: Kenkyusha Printing Co., Tokyo
Printed in Japan

ISSN 0387-2831

ドイツ文学　第146号　目　次

NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK
INHALTSVERZEICHNIS

特集：境界

Sonderthema: Grenze

葉柳　和則 Kazunori HAYANAGI: 特集 Grenze のための補助線 (Vorüberlegungen zum Sonderthema) 1

武田　利勝 Toshikatsu TAKEDA: 境界の自律性——カール・フィリップ・モーリッツにおける装飾の有機的自己形成について——(Autonomie der Grenze. Zur organischen Selbstbildung des Ornaments bei Karl Philipp Moritz) 9

大田　浩司 Koji OTA: 有限性と無限性との間の浮遊——ヘルダー，フィヒテ，ヘルダーリンにおける力と境界をめぐる思考についての考察——(Schweben zwischen Endlichkeit und Unendlichkeit. Betrachtung über die „Kraft“ und die „Grenze“ bei Herder, Fichte und Hölderlin) 24

香月　恵里 Eri KATSUKI: ノサックの「境界」——ハイデから「アポレー」への旅——(Nossacks Problem der Grenze. Eine Reise aus der Heide nach „Aporée“) 40

前田　佳一 Keiichi MAEDA: インゲボルク・バッハマンにおけるグレンツェ (Grenze) をめぐる一考察 (Zum Motiv der Grenze bei Ingeborg Bachmann) 55

杵渕　博樹 Hiroki KINEFUCHI: 死者と出会うための越境——ギュンター・グラス『グリムのことば』——(Grenzüberschreiten um Toten zu begegnen. Über „Grimms Wörter“ von Günter Grass) 72

石原　あえか Aeka ISHIHARA: 科学と芸術のはざまで——ゲーテ時代の大学絵画教師からムラージュ技師まで——(An der Grenze zwischen Naturwissenschaft und Kunst. Vom Universitätszeichenlehrer in der Goethezeit bis zum Moulagenmacher) 88

*　*　*

Die japanische Gesellschaft für Germanistik (JGG), der größte Verband von Germanisten und Deutschlehrern, in Japan, wurde im Jahr 1947 gegründet und zählt 1967 Mitglieder.
Präsident: Yoshiyuki MUROI
Sitz: MOA-Bldg. 603, Minami-Otsuka 3-34-6, Toshima-ku, Tokyo, 170-0005 Japan.
http://www.jgg.jp/

Die NEUEN BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK ドイツ文学 werden von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik (JGG) herausgegeben, unter Mitwirkung der Gesellschaft zur Erforschung der österreichischen Literatur, des Vereins für Goethes Naturwissenschaft und des Arbeitskreises für deutsche Grammatik. Die JGG publiziert sie, finanziell unterstützt durch die Japanische Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaft (The Japan Society for the Promotion of Science [JSPS]) und den Deutschen Akademischen Austauschdienst (DAAD). Diese Publikation setzt die über 50-jährige Tradition der Zeitschrift DOITSU BUNGAKU („Die deutsche Literatur") fort.

NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK

Band 11 / Heft 2
2012

Japanische Ausgabe von „DOITSU BUNGAKU"
Zeitschrift der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Herausgegeben
von
der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

特集：境界
Sonderthema: Grenze

Herausgebergremium und Redaktion

Kazuhiko TAMURA (geschäftsführend)
Oliver BAYERLEIN
Akihiro HAMANO
Yugyo IKEDA
Takashi KAWASHIMA
Erich MEUTHEN
Shinji MIYATA
Isamitsu MURAYAMA
Eberhard SCHEIFFELE
Satoru SHIMAZAKI
Ryosuke TAKAHASHI
Ryoko YOTSUYA
Yasuhiro FUJINAWA
Hiroshi HATAKEYAMA
Jiro INABA
Arne KLAWITTER
Hirofumi MIKAME
Mari MOH
Tatsuya OHTA
Gabriela Maria SCHMIDT
Makoto SHIMIZU
Hisataka TAKAIKE
Hiroaki YUASA
Yoshinori FUKUMOTO
Kazunori HAYANAGI
Katsumi IWASAKI
Ryosuke MATSUBARA
Hiroyuki MIYASHITA
Masami MORITA
Markus RUDE
Masaaki SHICHIJI
Hiroyuki TAKADA
Dieter TRAUDEN

ISSN 0387-2831

Neue Beiträge zur Germanistik Band 11/Heft 2 2012

Neue Beiträge zur Germanistik

Band 11/Heft 2
2012

ドイツ文学

146

特集：境界
Sonderthema: Grenze

Japanische Ausgabe von „DOITSU BUNGAKU“
Herausgegeben von der
Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Ikubundo